



チャイルドラインすいた

小谷訓子さん(76歳、岸部中5丁目)

子どもの声を受け止めるために

チャイルドラインは、18歳までの子どもの声を電話やオンラインチャットで聴く活動だ。ここでは、大人側の意見の押し付けや指導はしない。寄せられる声に真摯に耳を傾け、気持ちを受け止めることを大切にしている。活動が全国に広がるなか、ここ吹田を拠点に仲間と実施団体を立ち上げたのが、小谷訓子さんだ。

もともとは教員をしていたが、当時は現在のように育児休業がなく、保育園も整備されていなかったため、出産を機にやむなく退職し、専業主婦に。急に社会と交われなくなった閉塞感から、人知れず行き場のない思いを抱いた。

子育てがひと段落したとき、吹田での虐待事件を新聞で知った。「親が困ったときに寄り添える人は一人もいなかったのか」。衝撃を受け、駆け込み寺を作ろうと平成5年、仲間と2人で子育て支援などのボランティア活動を始めた。行政を巻き込み、仲間を増やしながら活動を続けるうちに、就学前の親子への支援は社会的にも広がった。ただ、小学生以上の子どもに対しては問題行動が取りざたされるばかりで、支援が抜け落ちているように感じていたという。「行動の背景には、一人ひとり事情があるはずなのに」「子どもの声を聴きたい」。そんな思い

を持つ仲間4人で「チャイルドラインの活動を吹田でもやろう」と立ち上げを決意し、準備を開始。仲間も集まり、平成26年、北摂初のチャイルドラインが始動した。

主な活動内容は子どもの声を聴いて社会へ発信することだが、受け手となるボランティアの募集と養成、地域の子どもたちに知ってもらうための広報活動も欠かせない。毎年、学校を通して、市内と近隣市の小中学生にチャイルドラインの概要や電話番号を記載したカードを配るほか、地域のイベントにも積極的に繰り出す。模擬店や寸劇などの催しを企画し、直接交流できる機会を増やしている。地道な活動が実を結び、「何かあったらすぐに電話できるよう、カードをお守り代わりに持ち歩いているねん」と話す子どももいるという。

昨年春、初めての緊急事態宣言が発出された。未曾有の事態にもかかわらず、メンバーそれぞれが今できることを模索し、一日も休むことなく活動できたのは、小谷さんにとってうれしいことだった。不安や困惑の声も寄せられるからこそ、メンバーが一人で抱え込まないよう助け合い、継続できる環境づくりを心がけている。これからも、すてきな仲間と「がんばりすぎない」「無理はしない」を合言葉に、子どもの思いを受け止めていく。